

第32期第6回京都市社会教育委員会議の模様を マナビィがレポート！



生涯学習のマスコット
「マナビィ」

平成28年12月12日(月)午後1時～3時、京都市生涯学習総合センター(京都アスニー)で、
第32期京都市社会教育委員会議の第6回目となる会議が開かれました。

会議の模様をわたくしマナビィがレポートします！

出席委員(17名のうち14名)

五十音順

井上 満郎 委員, 井上 章一 委員, 大八木 淳史 委員, 奥野 貴史 委員, 佐伯 久子 委員,
白井 皓大 委員, 鈴鹿 可奈子 委員, 鈴木 ちよ 委員, 園部 晋吾 委員, 西脇 悦子 委員,
橋元 信一 委員, 森 江里子 委員, 安成 哲三 委員, 吉川 左紀子 委員

■ 開会〔井上議長〕

■ 議事ー1 京都市内博物館施設連絡協議会及びI COM京都大会について

(事務局から)

京都市内博物館施設連絡協議会(略称:「京博連」)



- ・ 京都には、伝統文化や芸術、歴史など、様々な分野の個性豊かな博物館・美術館が市内全域に数多く存在しています。この特性を活かし、平成4年に市内の博物館施設の一大ネットワークとして発足したのが、京都市内博物館施設連絡協議会(以下「京博連」)で、現在、正会員209館・賛助会員20団体が加盟しています。
- ・ 京博連では博物館施設のネットワークを活かした様々な事業を行っており、主なものとして、以下の6事業があります。これらの事業を通じて、博物館活動の発展、市民や観光客が博物館や美術館に親しむ機会の創出、文化の振興などに取り組んでいます。

①「博物館講座」

京博連加盟館において、毎年10月～翌年2月に毎月1回(全5回)開講している市民向け講座。講義以外にも体験講座や2館連続講演など多様なスタイルで実施。

②「博物館ガイドブックの出版」

京博連加盟館の魅力を紹介する書籍として平成5年に初版を発行し、現在は「京都ミュージアム探訪」というタイトルで全国の書店で販売中(英語版あり)。また、平成23年に200館加盟達成記念として出版されたハンドブック「京発見!ミュージアムへ行こう」も販売中。

③「京都ミュージアムロード」

市民や観光客に京博連加盟館に親しんでもらうため、毎年1月下旬～3月中旬に開催しているイベント。期間中に実施するスタンプラリープレゼント企画(各館を巡ってスタンプを3つ集めると抽選でプレゼントが当たる)は毎年好評。

④「博物館ふれあいボランティアによる活動支援」

博物館ふれあいボランティア(京博連加盟館で業務をサポートしながら、自らの学びにつなげているボランティア)を平成11年度から養成。養成講座修了者は、ボランティア団体「虹の会」に所属し、現在224名の会員が活躍中。

⑤「情報発信事業」

「京博連ホームページ」をはじめ、様々な媒体を通して事業実施情報などを発信。

⑥「加盟館職員研修会」

各館の運営や学芸員の知識・技術の向上を目的とし、多彩なテーマで実施している京博連独自の研修会。

ICOM(国際博物館会議) 京都大会

ICOM
KYOTO 2019

平成31年9月1日～7日
京都で日本初開催！！



- ICOMは、世界の博物館の発展を目的に活動する世界唯一の博物館の専門組織で、136の国と地域から博物館の専門家約3万5千人が参加しています。3年に1度、組織内にある様々な委員会が一堂に会する世界大会が開催されており、平成31年9月には京都で開催されます。
- 大会誘致にあたっては、京都市をはじめ、京都府や京都商工会議所などオール京都体制で取り組み、平成27年のICOM年次総会では、鈴鹿委員にも御出席いただき、京都の魅力をアピールしていただきました。その結果、京博連の存在を含めた京都の高い文化力が決め手となって、他の立候補市に大きく差をつけて京都開催が決定し、今年7月に開催されたICOMミラノ大会において、大会旗を引き継いできました。
- ICOM京都大会では、115か国・3,500人程度の参加を見込んでおり、開会式や総会のほか、京都や関西圏の博物館を活用したイベントが実施される予定です。
- 開催に向けて、京都市では、市民の皆様にICOM京都大会を知ってもらい大会を盛り上げる機運を創出する取組を実施し、また、専門家だけでなく市民も楽しめるイベントを企画してまいります。具体的には、様々な課題解決について検討する京都推進委員会の発足、京博連内の若手学芸員を中心に大会に向けたイベントなどを検討する「ミュージアム・京(みやこ)・ミーティング」を組織、大会を盛り上げるための2年前イベント開催、関係機関への「ICOM大会関連事業」実施や大会ロゴマーク使用協力の依頼を行います。なお、今年度は「ICOM関連事業」として、閉館後の博物館で、館長や学芸員がギャラリートークなどを行う「ナイト・ミュージアムトーク・京都」を2月～3月に実施します。
- この大会をきっかけに、市民の皆様に博物館や美術館を身近に感じていただくとともに、一緒に大会の機運を盛り上げ、楽しんでもらえるよう、引き続き、広報活動やイベントの企画運営に努めてまいります。

○ 井上 満郎 議長(京都市歴史資料館長,京都市埋蔵文化財研究所長,京都産業大学名誉教授)

博物館の運営・振興にとって最大の問題は、受け手(利用者)にどのようなアプローチをするのかということではないでしょうか。私は、韓国の博物館に行ったことがあります。そこでは、子どもたちがたくさん来館し、引率者から説明を受けていました。このような風景は、日本の博物館では見たことがなく、韓国の博物館における、子どもたちへの文化継承のための努力には非常に興味深いものを感じました。



○ 鈴鹿 可奈子 委員(株式会社聖護院八ツ橋総本店専務取締役)



まず、昨年京都大会誘致のために出席した、ICOM年次総会(パリ)について御報告します。年次総会では、海外の博物館関係者と直接お話しする機会が多くあり、皆さんから「京都のまちの中にある文化」を体感することへの期待を強く感じました。私は祖母の着物を着てスピーチをしたのですが、古いものが受け継がれ、今でも美しく使われていることにも興味深そうでした。さらに、日本の工芸品の繊細さ・緻密さにも興味があり、京都でのエクスカージョン(視察)をととても楽しみにされていますので、大会では、京都市民と触れ合いながら、京都のしきたりや代々受け継がれている品物などについてお伝えすることができれば

大変喜ばれるのではないかという印象を受けました。エクスカージョンにも市民がどんどん参加し、大会参加者と交流できるようにすると良いのではないのでしょうか。

また、I COM京都大会に関連して京都国立博物館の会議にも出席していますが、そこでは、日本人の日本美術作品に対する興味が海外の作品に比べて希薄だということが話題になっています。海外作品の展覧会には入館待ちの行列ができるのに、日本作品の常設展には待ち時間がなくても行かないという傾向があるようで、これには、小さい頃からの習慣と関係があるのではないかとされています。最近では、一部の日本画家の特別展が注目を集めることもありますが、日本の芸術品の素晴らしさについて、小さい頃から伝えていくことが大切だと考えています。

最後に、私は美術館が好きで、世界各地の美術館に足を運んでいます。海外の美術館は子どもたちに開放されています。美術館の中で模写やスケッチをしても構わないというのは、日本の美術館と大きく違うところです。このように、作品と身近に触れることができる環境下では、子どもたちは作品を敬うことを学習するので、むやみに作品に触れることはありません。京都を含め日本の美術館でも、開館時間中ずっとというのは難しいかもしれませんが、模写ができるなど、作品ともっと身近に接することができる時間を作っていただければ嬉しいです。

○ 奥野 貴史 委員（平成27年度京都市PTA連絡協議会会長）



子どもに限定すると、子どもたちが博物館や美術館へ行く機会は少ないですし、私自身も子どもの頃はあまり行きませんでした。最近では、行くとなんかの発見ができる場所だなあと感じています。博物館や美術館には、敷居が高く行きにくいというイメージがあるように思いますので、この敷居が低くなればありがたいです。例えば、子ども祭りなどで博物館が体験型のイベントをされると、子どもたちは興味津々で長蛇の列を作ります。このように、館外へ飛び出し、イベントへも積極的に参加してもらえると、子どもたちの博物館などに対する敷居が少しずつ低くなるのではないのでしょうか。

○ 井上 満郎 議長

近年、博物館などの施設は主催イベントの開催や他のイベントへの出張参加にかなり力を入れています。ただ、通常業務をこなしながらこれらのイベントを実施していますので、頑張れば頑張るほど、館員の負担が増えるという課題も出てきます。地域行事などへの積極的な参加と館員の負担との兼ね合いについても、今後は検討が必要だと感じています。

○ 安成 哲三 委員（総合地球環境学研究所所長）

博物館や美術館に対する敷居が高いと感じる理由の一つには、入館料の問題があると思います。有料だとそれが高額ではなくても「入館料がいるから」と足を運ばない人もいます。そこで、I COM京都大会期間中に京博連加盟館全館無料という大胆なことをしてみてもどうでしょうか。そうすれば、「無料なら行ってみよう」と博物館に対する敷居が低くなり、また、「行ってみたら楽しかった。（有料でも）また行こう」と入館者の増加につながるかもしれません。加盟館には大小様々な規模の館があり、館の経営上、全館で無料とするのは難しいかもしれませんが、京都にあるたくさんの優良企業から寄付金を募るなど、何らかの手立てはあると思います。期間限定であっても、無料にして入館してもらおうということが大事だと考えます。



(事務局から)

ICOM大会期間中全館無料は理想ではありますが、加盟館の中には小規模施設も多いため、まずは、各館の運営を第一に考えたいところです。ただ、無料にすることで入館者数が増え、長期的にみて各館にプラスとなる可能性は十分にありますので、実現には課題も多くありますが、企業からの寄付を募るということも含め、検討させていただきます。

○ 吉川 左紀子 委員 (京都大学こころの未来研究センター教授・センター長)

京博連加盟の各館で、英語での情報発信はどの程度されていますか。既に英語版の広報媒体があるのであれば、それをPDF化してウェブサイトに掲載し、海外から参照できるようにすると良いでしょう。可能であれば、ICOM京都大会を機に、英語のサイトを作り、国際的な情報発信に力を入れてみてはどうでしょうか。博物館には見る人の視覚に訴える展示品がたくさんあるはずですので、その画像と簡単な解説を英語で発信すれば、大会に参加される方も行きたい博物館や見たい展示物を確認することができます。また、海外の方は日本人とはまた異なる興味、関心をもっていることもあると思いますので、事前に海外の方が関心を持っている京都の文化について、情報を収集することも必要だと感じました。



(事務局から)

現在、京博連加盟館の中で、ウェブ上で英語での情報発信を行っている館はわずかです。英語だけでなく多言語に対応している館もある一方、ホームページがない館もわずかながらあるのが実情です。そこで、まずは、ホームページの開設100%を目指し、外国語については早期の整備協力を依頼していきたいと考えています。また、既に英語版で出版されている「京都ミュージアム探訪」のウェブ上での公開については、著作権の問題もありますので、各館と相談しながら検討してまいります。ICOM京都大会、その翌年の東京オリンピック・パラリンピックとその後を見据え、ホームページをはじめとする情報発信の充実は非常に大きな課題であり、引き続き、取組を進めます。

○ 白井 皓大 委員 (市民公募委員)

ICOM京都大会があるからというわけではなく、普段から博物館や美術館に行くことは非常に大切です。海外では、学生などが入館しやすいよう「ユース料金」という若者向けの料金設定があり、同様のものが日本でも広く導入されればと感じました。また、博物館と大学とがそれぞれ提携し、学生が安価で入館できるようにする「キャンパスメンバーズ」という制度もありますが、とても良い制度なのに認知度が低いので、周知強化と利用可能施設の拡大が必要だと考えています。



○ 西脇 悦子 副議長 (京都市地域女性連合会相談役)



京博連は20年以上前からある組織だということですが、市民の中には、その存在がまだまだ浸透していないと感じています。メディアで注目されるなど、テーマに話題性があると、市民の関心や意識も高まります。私が所属する地域女性連合会で学習会をするときも、その時々大きな話題になっていることを取り上げると、参加者の関心が高まり、学習会終了後も地域の中で話題が広がっていきます。京博連についても、ICOM京都大会の日本初開催という大きな話題がありますので、市民のみならず多くの方々の心に響く情報発信をしていただきたいと思います。

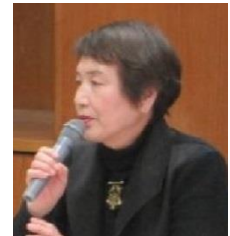
○ 森 江里子 委員（京都市小学校長会副会長・京都市立洛央小学校長）

以前勤務していた小学校では、近くに京都市美術館がありました。子どもたちは無料で入館できたので、クラブ活動でよく美術館の展示品を見せていただきました。子どもたちの関心はとても高く、美術館で学んだことを自身の作品制作に取り入れることもありました。もっと子どもたちを美術館に連れて行きたいのですが、作品について理解し、子どもたちに伝えることができる教員の数が少ないのが現状ですので、教員向けの研修会なども実施していただけるとありがたいです。



○ 佐伯 久子 委員（京都ユネスコ協会会員）

今年度のICOM関連事業では、青少年科学センターや漢字博物館・図書館、マンガミュージアムなどでイベントをされるそうですが、子どもだけでなく、保護者も一緒に楽しめることも大切ではないでしょうか。そのようなイベントがあれば、親子で出かけるきっかけにもなり良いのではないかと感じました。



○ 井上 章一 委員（国際日本文化研究センター教授）



ICOM大会などの大規模な催しを行う際、その成功を何人動員できたかで測ることは少し切なさを感じます。もちろん、大人・子どもを問わず、たくさんの方が参加されることは大事ですが、動員数のみが評価基準になっている点は気になります。ICOM京都大会では、作爲的な動員をやめて、数には踊らされない、大人のまち・京都をアピールしていただきたいものです。

■ 議事-2 「京都市学校施設マネジメント基本計画（案）」に関する意見募集について
（事務局から）

- ・ 京都市では、現在、築後30年以上を経過する学校施設が全体の約7割を占め、学校施設（校舎・体育館・プール・運動場など）の老朽化対策が喫緊の課題となっていることから、今後の学校施設の維持管理などについて、基本的な方向性を「京都市学校施設マネジメント基本計画（案）」（以下「計画（案）」）にまとめました。本計画（案）は、国の「インフラ長寿命化基本計画」に基づき作成された「京都市公共施設マネジメント基本計画」の施設類型別計画に位置付けられます。
- ・ 計画（案）では、学校施設の長寿命化を進め、目標使用年数を「60年」「80年」「100年」の3種類に分け、同時期に改修・改築が重ならないようにすることで、財政支出の平準化を図ることとしています。加えて、改修・改築を行う際には、物理的な機能回復にとどまらず、新たな教育ニーズや多様な社会的ニーズにも対応してまいります。



※ 長寿命化とは・・・

基礎や柱など、建物の主要部分（構造部分）を残し、老朽化防止のための対策を施すとともに、その他の箇所をすべて新しくするという改修方法です。これにより、新築と同じようになり、使用年数も長くなります。

○ 鈴木 ちよ 委員（市民公募委員）



学校施設の使用年数を長くしても、環境への配慮がなされていなければ、長寿命化する意義も薄まってしまいますので、是非ともクリーンエネルギーの活用など、環境に優しい施設整備を進めていただきたいです。また、これからの学校の在り方を考えたときに、学校だけで完結してしまうのはふさわしくありません。いろいろな人が学校に出入りすると、当然、防犯面の問題も出てきますが、一市民としては、学校が地域に開かれ、その中に、地域の方も学ぶことができる「知の拠点」ともいえるスペースが確保されていると嬉しいです。

○ 大八木 淳史 委員（ラグビー元日本代表、芦屋学園中学校・高等学校長）

パブリックコメントのような広く一般的な意見募集にとどまらず、内容について詳しい団体や企業に具体的に提案を投げかけていくことも必要です。今回の計画（案）であれば、地域の実情をよく把握している地元の方などに、内容について説明して意見をもらい、それを反映していくという作業をしないと、抽象論に終始し、失敗に終わってしまう可能性があります。



また、近年は、建築技術も進歩が早く、5年前の技術は既に古いということもあり得ますし、100年もつ建築工法で建てられた建物でも多額の維持経費が必要になるかもしれません。そこで、長寿命化とは逆行しますが、歴史的価値のある部分は除いて、その時々に応じた建築工法でどんどん建て直していくという考え方も必要だと感じています。

○ 安成 哲三 委員

京都市でも、児童生徒数が増加している地域と減少している地域とがありますが、この計画（案）では、地域の学校づくりの再編成や学校教育がどうあるべきか、また、学校の統廃合の予定について考慮されているのでしょうか。

（事務局から）

本計画の上位計画である「京都市公共施設マネジメント基本計画」には、現在の施設保有量を最大値とすることや、再編・再整備、複合化などを図ることが示されていますが、学校については、京都市では、地元主導で学校統廃合を進めていることもあり、今回の計画（案）において、学校の計画的な統廃合という観点は含まれておりません。

■ 報告一 「健康長寿のまち・京都」の取組について



（事務局から）

- 「健康寿命」とは、健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間のことを指します。日本は長寿国ではあるものの、健康上の問題で日常生活が制限される期間が10年程度あるのが現状です。そこで、高齢者が生きがいを持って地域社会で活躍できる社会を実現し、あわせて医療費などの社会保障関連経費の伸びを抑制できるよう、市民の健康寿命の延伸を図ることが極めて重要な課題となっています。
- 京都市では、これまでから「[京都市民健康づくりプラン（第2次）](#)」に基づき、健康寿命延伸のために取り組んできましたが、行政のみならず、市民の皆様とオール京都で取り組む運動に発展させるため、新たに「健康長寿のまち・京都推進プロジェクト」を立ち上げました。
プロジェクトでは、「本市の関係施策の融合」による市民の主体的な取組のための仕組みづくり、「幅広い市民団体・関係機関・民間企業との共汗」による市民ぐるみの運動という2つの取組を連携・推進しています。
- 「施策の融合」では、平成27年6月に全庁横断組織「健康長寿のまち・京都推進本部」（平成28年4月に健康長寿のまち・京都市内推進本部に改称）を設置し、地域コミュニティの活性化や高齢者の生きがいづくり、生涯学習など、各局区の既存事業の融合を進めています。「市民との共汗」では、平成28年5月に、オール京都で市民ぐるみの健康づくりを推進していくための運動組織「健康長寿のまち・京都市民会議」を設立し、90の市民団体・関係機関・民間企業等の参画のもと、「健康長寿のまち・京都」の実現を目指した取組を進めています。

- 平成28年度は、主に以下の3点に取り組んでいます。
 - ① 京都市の健康づくり施策に関する「イメージキャラクター」として、イベント参加などを通じて、あらゆる世代の方々へ健康づくりの活動を呼びかける京都市健康大使の任命
 - ② 「健康長寿のまち・京都」の理念や取組など、健康づくりに特化した情報を総合的に発信する健康長寿のまち・京都ポータルサイトの開設
 - ③ 日々の健康づくり活動を「健康ポイント」として「見える化」することで、達成感を得つつ習慣化を図るとともに、一定の活動成果によって抽選でプレゼントが当たる健康長寿のまち・京都市いきいきポイントの開始
- 今後は、健康寿命の延伸に向けた理念や取組の浸透を図り、市民全体の機運を盛り上げる取組を推進するとともに、それを土台に健康づくりのための多様な機会の創出・情報提供の充実に取り組んでいきます。さらに、様々なコミュニティの中で、仲間同士からの声掛けや励まし合いを行うことによって、全ての市民が多様な健康づくり活動に参加していくことを促し、一人一人が年齢を重ねてもいきいきと活躍できる地域社会「健康長寿のまち・京都」の実現を目指してまいります。



京都市健康大使には、本田紗来さん、朝原宣治さん、奥野史子さん、市田ひろみさん、千玄室 大宗匠、宮崎秀吉さんが御就任。幅広い年齢層の大使の皆さんが御活躍中です！

○ 白井 皓大 委員

今後、取組の成果や課題についてどのように評価されるのでしょうか。せっかく良い取組がされているのに、評価基準が市民会議への参画団体数やいきいきポイントのプレゼント応募者数のみだとすると、少し残念な気がします。

（事務局から）

取組の評価は、「京都市民健康づくりプラン（第2次）」の中で掲げている「身体活動・運動」など6つの分野別行動指針や数値目標と照らし合わせ、活動者にどのような変容があったのかを個々に分析することにより行います。あわせて、活動者の生活改善などの状況についても情報を集約・分析し、総括的な評価を行ってまいります。

○ 橋元 信一 委員（日本労働組合総連合会京都府連合会会長）

健康寿命を延伸するには、基本的には、自己の健康管理が重要ですが、自己を取り巻く人々がどのような働きかけをしてくれるのかということも大切です。その点で、「健康長寿のまち・京都」実現のための様々な取組は効果的だと思います。また、取組の成果はすぐに出るものでなく、長い目で見る必要があると考えています。



○ 佐伯 久子 委員

私が所属する京都市地域女性連合会では、日々地域での学習と実践を行う本来の活動に加え、「健康長寿のまち・京都市民会議」を含む、様々なネットワークの活動に参画することで健康を保っています。今後も、可能な範囲で活動に参加できればと考えています。

○ 西脇 悦子 副議長

健康に年齢を重ねていくために一番大事なことは、一人一人が健康の大切さを認識することです。健康であることがなぜ大事なのかということの意識付けができ、健康づくり活動に参加することが自身にプラスになると実感できれば、市民の方々も参加されるはずですよ。

■ 報告-2 第58回全国社会教育研究大会千葉大会について

(事務局から)

10月27日・28日、第58回全国社会教育研究大会千葉大会が開催され、「学び合い、支え合い、高め合う 社会教育の創造」を主題として、記念講演やシンポジウム、分科会が行われ、本市からは、鈴木委員が出席されました。

○ 鈴木 ちよ 委員

1日目の記念講演では、ディズニーランドやディズニーシーを運営されている、株式会社オリエンタルランドの金木有一^{かねきゆういち}氏が「社会に役立つ人づくり」と題して、社会や人のために自分で考えて動くことができる人材育成の実践例をお話しされました。また、同日のシンポジウムでは、「地域コミュニティの再生に向けて」をテーマに、安心・安全・子育ての3つを核にしたコミュニティづくりの推進について、具体例を交えた意見交換が行われました。地域に住む全ての人が、自らの地域について学び・知り・語り合える場を作り出すことによって、多くの好循環が生まれていくのだと改めて感じました。

2日目の分科会では、「社会教育委員の役割」をテーマに、少人数(6人)で議論や情報交換を行いました。小学生が公民館に宿泊・通学するという宿泊学習の取組、社会教育委員会議を毎回異なる博物館で実施し、委員自らが博物館の活用法について思いを巡らせる試みなど、それぞれの地域資源を活かしたユニークな取組について、詳細な情報を得ることができました。

普段なかなか触れ合う機会がない全国の社会教育委員の方々と実際に交流し、貴重な体験を分かち合うことによって、人づくり・まちづくりに携わっている社会教育委員の存在意義や責任について考えを深めることができました。今回の大会参加で得られたことを、今後の社会教育委員会議の場で還元できればと思っています。

■ 報告-3 平成28年度京都市生涯学習市民フォーラムについて

(事務局から)

- ・ 去る11月5日(土)に京都堀川音楽高校にて開催し、約450名の市民の皆様に参加いただきました。
- ・ 第1部の総会では、松本紘フォーラム新会長と門川市長から、83名の方々へ生涯学習推進者表彰を授与し、新規加盟9団体の御紹介をしました。
- ・ 第2部の松本会長就任記念講演では、「科学技術・イノベーションのこれまでとこれから」と題し、科学技術が今後果たしていくべき役割について、分かりやすくお話しいただきました。
- ・ 第3部のシンポジウムでは、「京都から世界へ！市民が主役 暮らしの中にある文化 ～文化の継承による日本の創生～」をテーマに、本家尾張屋16代目当主で写真家の稲岡亜里子さんをゲストにお招きし、松本会長・門川市長とのディスカッションを行っていただきました。

近日中に「京まなびネット」と京都市情報館でシンポジウムのレポートを公開予定です。



■ 報告-4 「学びやタイムスリップ 近代京都の学校史・美術史」の刊行について

(事務局から)

- ・ この度、京都市学校歴史博物館が編集した「学びやタイムスリップ 近代京都の学校史・美術史」が刊行されることになりました。本書は、平成26年10月～平成28年3月に京都新聞に掲載されたコラム全74回を加筆修正したもので、近代京都の学校史と美術史で構成されています。

- 平成30年の当館開設20周年，平成31年の番組小学校創設150周年という大きな節目を前に，京都発の教育の姿，地域と学校が共に育ってきた人づくりの系譜を，本書の発刊を契機として，全国に発信していきたいと考えています。



学校史では，番組小学校創設や全国をリードする特別支援教育の歩みについて，美術史では，学校に寄贈された多くの美術作品とその背景事情について詳しく解説しています。

■ 主催事業 及び 刊行物等の案内・説明

■ 閉会〔井上議長〕

■ 閉会挨拶

在田正秀 教育長から挨拶がありました。

